

飯舘村スタディツアー参加レポート

国際交流学科3年 AN

「飯舘村」私の地元から車で一時間程度で行ける距離であるにも関わらず、そこで行われている多くの復興作業をこの目で見たのは今回が初めてでした。震災から4年も経っているのに、その間私は何も知らずとせず、自分の身の回りで起きた変化(福島県産の食べ物の放射能測定強化)やメディアで流れている情報だけを聞き、今の福島の実状を見ているだけでした。そんな時に、ゼミの先生である高雄先生の提案で飯舘村のフィールドワークを企画することになり、私は自ら原発事故の問題と、それによって生まれた地域への影響というものに、初めてしっかり向き合う機会をいただきました。

“百聞は一見にしかず”この言葉がこんなにも当てはまるのか。飯舘村に行った際にとっても強く思ったことです。

まだ完全に帰ることのできない村の多くの家々を見て、“全村避難”という言葉だけ聞いては想像できないような辛さや悲しみが伝わってきました。生まれ育った、住み慣れた家がないということがどれほど辛いのか。前回帰省した際に初めて帰る家があるということへのありがたみを感じられました。

また一番はやはり、菅野さん宅にあるビニールハウスでの科学技術を駆使して栽培されている野菜を見たときは、本当に驚きました。これからの農業の在り方や、限りある資源をどのように有効的に使っていくかということなど、今多くの課題が残る日本で、こんなにも解決できてしまっているのではないかと衝撃を受けました。安全とは何か、というお話になった際に、食べ物が一番大事とおっしゃっていました。食糧戦争になった際に、日本は飯舘村のような自然豊かな土地を利用して食べ物を生産しなければならなくなるかもしれません。その際に、現在飯舘村で行われている作物の栽培方法は、今後の日本の農業の先陣を切っていくと思えるくらい画期的なものでした。

飯舘村で様々なものを見て、お話を聞いて、多くの方とふれ合って得たものは想像以上に明るく、大きな可能性を感じられるものばかりでした。それまで知識しか学んでこなかった私に、実際に現地に行って、見て、そこから感じ取ることの大切さを教えてくださいました。菅野さんは、「今回来た人と来なかった人、お互いの立場を尊重し合ってください。」とおっしゃりました。価値観やどのように行動するかという判断は確かに人それぞれですが、どこの地域が危ないというその線引きをするのは、実際に現地に行って自分の目で見て判断してほしいなと思いました。放射能という目に見えないものへの恐怖は誰にでもあると思います。しかし、それがどこまで安全でどこからが危険かということメディアだけの情報で判断しては、いつまでたっても何も変わることはできないと思います。自分で体験するからこそ見えてくるものがあるのだなと実感できました。

2日目にいただいたハウス栽培の小松菜、本当に美味しかったです。家に持って帰って、お味噌汁とお浸しにして妹にも食べさせたところ、すごくおいしいと言って喜んで食べていました。今度は自分で植えた小松菜を収穫に行きたいです！

2日間にわたり、貴重なお話と体験をさせていただき、本当にありがとうございました。